

ベンガルのバウルのライフヒストリーの研究(2)

村 瀬 智

要 旨

本研究は、インド・ベンガル地方の「バウル」と呼ばれる宗教的芸能集団のライフヒストリーの研究である。

個々のバウルのライフヒストリーは、それぞれ個人の経験を表現したもので、それ自体で完結した世界をあらわしている。しかし、ひとりの人間の人生の物語には、その人を取りまく社会の描写があるはずである。ひとりの人間のライフヒストリーは、絵画や写真にたとえば、その人の「肖像」であると同時に、その人に焦点をあわせた「群像」でもある。本研究では、あつめた資料を読者に提示する方法として、「ライフヒストリーの重ねあわせ」という手法を採用する。すなわち、複数のバウルのライフヒストリーを並列させて、ベンガル社会における「バウルという人間集団」を描きだす。

キーワード：ライフヒストリー、マドゥコリ、通過儀礼、カースト制度、世捨ての制度

目次

I. 序

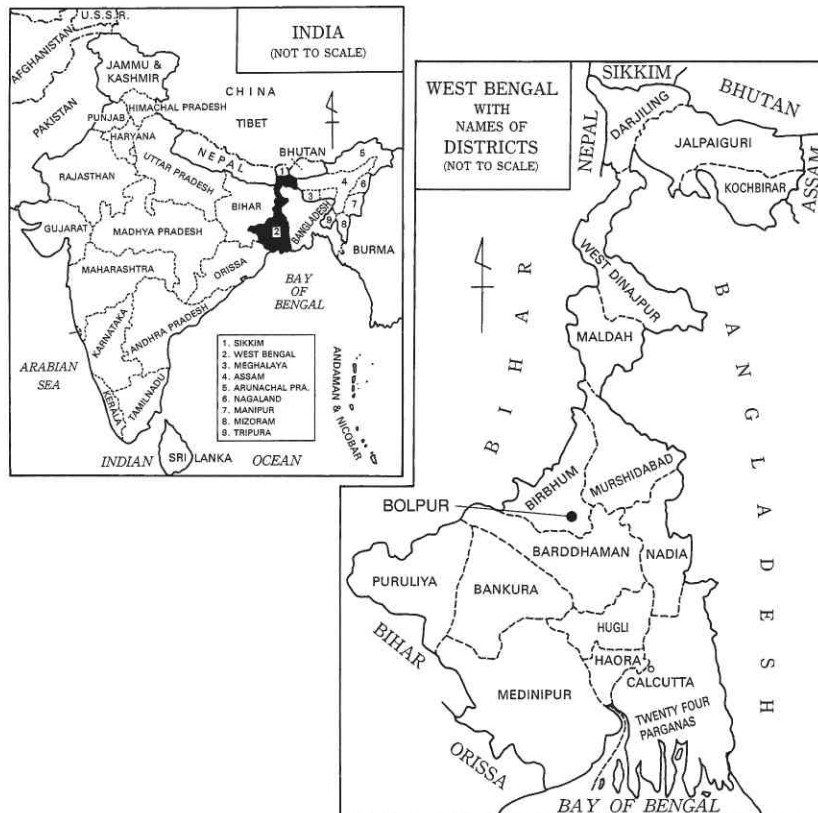
II. ライフヒストリーの記述

1. 振り子行者
2. 詩人バウル
3. 元バラモン
4. 宿なしバウル
5. 10ルピー・バウル
6. いなかバウル
7. 歌姫の息子

III. 跋

本稿の前書き

本稿は、『大手前大学論集』第13号に掲載された拙稿「ベンガルのパウルのライフヒストリーの研究(1)」[村瀬 2013: 135-167] のつづきである。また本研究は、本論集に6回にわたって掲載された拙稿「ベンガルのパウルの文化人類学的研究」[村瀬 2006: 331-349、2008: 171-188、2009: 253-275、2010: 213-235、2011: 213-228、2012: 263-284] の補遺でもある。



地図1：インドおよび西ベンガル州
(出典：Tourist Map of West Bengal)

Ⅱ. ライフヒストリーの記述 (つづき)

5. 10ルピー・バウル

5-0. はじめに

ビルブム県のボルプールは、コルカタ（カルカッタ）の北西約160キロ、急行列車で約3時間の距離にある地方都市である。ボルプールに隣接するシャンティニケートンは、詩人タゴールが創設したヴィシュヴァ・バーラティ大学の所在地として有名である。

シャンティニケートンのゴパール・ダシュ・バウル（Gopal Das Baul）は、1955年生

まれの若いパウルである。彼は自分のことを「10ルピー・パウル」(ドシュタカ・パウル)と呼ぶ。これは、彼のマドゥコリによる稼ぎが、1日10ルピー程度であるからだろう。以下は、自称「10ルピー・パウル」が、駆け出しのパウルだった頃までの物語である。

5-1. 幼年時代

わたしはコパイ駅近くのコパールナガール村で生まれました。わたしは3人兄弟の末っ子でした。母はわたしが生後3週間の赤ん坊のときに死にました。ですから、わたしは母の顔を知りません。母の死後、わたしは、「ピシ」(父の姉妹)に育てられました。

母の死後しばらくして、父は再婚しました。わたしが5歳のとき、父はわたしを学校にやりました。わたしはピシの家から通学しました。しかし、わたしが8歳のとき、ピシは不幸な死をとげました。彼女は池で水浴中に心臓発作をおこし、そのまま溺死したのです。ピシの死後、父がわたしを引き取りました。父の家には、父のほかに、継母、腹ちがいの妹がふたり、長兄と彼の妻、そして次兄がいました。

わたしが10歳のとき、父は急性肺炎であっけなく死にました。父の死後すぐに、長兄はわたしに学校をやめるように命じました。

5-2. 家出

父は農夫でした。わたしの家には1.5ビガ¹(約3794m²)ほどの農地がありました。しかし、それだけでは全員が必死で働いても、食べるだけで精いっぱいでした。わたしも兄と一緒に田畑で働きました。しかし、わたしは農作業が不得意で、まぬけな失敗ばかりしていました。失敗するたびに、ふたりの兄にどなられました。継母と兄嫁はわたしを嫌悪していました。なぜなら、わたしがいつもひどい皮膚病にかかっていたからです。

それは、わたしが病気で数日寝込んだときのことでした。継母と兄嫁は看病をしてくれませんでした。それどころか、わたしに食事を与えませんでした。あまりに腹がへったので、継母と兄嫁の制止を振り切って台所にはいり、食べ物をさがしました。しかし継母と兄嫁は、食べ物を不浄にしたのはわたしの責任だと、わたしを竹箒で何度も打ちました。わたしは逃げだしました。継母や兄嫁にぶたれたのは、それがはじめてではありませんでした。村の外側のマンゴー畑に座って、わたしは「かわいがってくれたピシも父も死んでしまった。ぼくはだれからも愛されていない」と、泣いていました。

長兄がマンゴー畑で泣いているわたしを見つけました。そして、わたしのことを怠惰で反抗的だとなじり、わたしを殴りつけました。それは決定的な瞬間でした。わたしはその夜、そっと家をぬけだしました。家出をしたのは、11歳のときでした。

1 ビガはインドの地積の単位。1 bigha ≒ 2529m²。

わたしは、自分がどこへ行こうとしているのかもわからず、ただ歩くだけでした。月が明るかったので、足元ははっきりとみえました。カシュバ運河まで来たとき、わたしはひどく腹がへっていたのだと気づきました。わたしはポケットに40ルピーほどもっていました。その金は、駄賃でもらった小銭をためていたもので、家族にも内緒の金でした。わたしは茶店をさがしました。しかし、そこはたまねぎ畑で、茶店などあるはずがありません。わたしは、おおきなたまねぎをひきぬいてそれをかじり、運河の水で口をすすぎました。橋の下に横になると、そのまま眠ってしまいました。

夜明け前、鳥のさえずりで目がさめました。わたしは、ふたたび歩きはじめました。昨夜から歩きまわったあぐく、結局はコパイ駅に来てしまいました。それは、朝の8時ごろでした。とりあえず駅のベンチに腰をおろしました。

わたしはベンチに何時間もすわっていました。自分がどこへ行って何をすべきか整理がつかず、不安でした。何本もの列車が駅を通過しました。数本の列車がしばらく停車し、北へ、あるいは南へと、ゆっくり発車しました。夕方近くになって、やっと、シャンティニケートンに「ママト・バイ」(母の兄弟の息子)がいることを思いだしました。わたしは次の列車に乗ることにしました。

ママト・バイは、竹製品を作る職人でした。彼は、わたしがだれか、しばらく気づきませんでした。わたしの出現にいらしたようすでしたが、わたしがポケットの金を全部つかんで彼にさしだすと、「ここはせまいけど、しばらくいてもいいよ」と、いいました。そして、わたしに水浴びをさせ、食事を与えてくれました。

わたしは、ママト・バイのこたばを聞いてほっとしたのか、急に疲労を感じ、そのままうとうとと眠りこんでしまいました。夜中、寒気を感じて目がさめました。熱があるのか背中がぞくぞくしました。わたしはそのまま高熱で数日寝込んでしまいました。

5-3. ララ・バブ

わたしはシャンティニケートンの上流家庭の「家事使用人」の仕事にありつきました。給料は、住みこみで月20ルピーでした。わたしの主人はヴィシュヴァ・バーラティ大学付属病院の歯科医で、「ララ・バブ」と呼ばれていました。彼の妻の「プスパディ」は、タゴール族の一員でした。彼らはわたしをかわいがってくれました。

わたしの仕事は、それが何であれララ・バブやプスパディがわたしに命じたことをすることでした。すべての部屋の掃除をし、庭でつんだ花で部屋をかざりました。また料理人や庭師の仕事も手伝いました。プスパディが外出するときには、いつも彼女の従者としてお供をし、身のまわりの世話をしました。

ララ・バブはお酒が好きでした。彼は、州政府公認の「バングラ」という商標の焼酎を1日1本と、酒量をきめていました。そして毎日、わたしに1日分のお酒を買いに

行かせました。酒の販売所はボルプール駅の近くにありました。これは楽しい日課でした。なぜなら、ララ・バブは釣り銭をいつも駄賃としてくれたからです。このおかげで、わたしは小遣い銭に不自由したことがありませんでした。また毎月、給料の全額を貯金することもできました。

ララ・バブの家に、しばしばバウルがマドゥコリにやってきました。わたしは彼らの歌が大好きでした。わたしに暇な時間とポケットに小銭があるときには、彼らをベランダまで招き入れ、歌をうたってもらいました。そして彼らの歌が気に入ると、もう一度リクエストし、歌詞を紙に書き留めました。そして、夕食後にはコップや食器皿を小枝でたたきながら、それらの歌をうたったものでした。

ララ・バブは中古車を購入し、お抱えの運転手を雇いました。わたしは洗車をする運転手をいつも手伝いました。また、車を整備する彼をいつも観察していました。そのうちに、簡単な作業をさせてもらうようになりました。ある日、わたしが車庫の前でタイヤの交換をしていたとき、ララ・バブが通りかかりました。彼はわたしの慣れた手つきを見て、「ゴパール。きみは車が好きなようだね。もしきみが運転免許証を取得すれば、ヴィシュヴァ・バーラティ大学の運転手の職にありつけるかもしれないね」と、暗示しました。

ララ・バブは、毛並の美しい大きな犬を飼っていました。シャンティニケートン北端のコパイ南本流運河にそって野原がひろがっており、その野原で犬を散歩させるのが、わたしの日課のひとつでした。その野原へ往復する途中に、シュバシパリ村という難民村がありました。そして、その村の土地一区画に「売却中」の看板がたっていました。その土地はかなり広く、およそ5カタ²（約335㎡）ありました。

わたしには、その土地を買うだけの貯金がありました。しかし、その土地を買う決心をするまで、ずいぶん考えました。わたしは、住みこみの家事使用人の仕事を一生する、とは思いませんでした。それが何であれ、もしわたしが別の仕事につけば、ララ・バブの家を出なければなりませんでした。わたしが一生独身のままでいる、ともいませんでした。将来は、おそらく結婚して家庭をもつだろうと思いました。熟考した結果、わたしはその土地を購入する決心をしました。ララ・バブとプスパディは、「ゴパールがジョミンダール（地主）になった」と大喜びで、わたしを褒めてくれました。わたしはそこに小さな家を建てました。そのとき、わたしは17歳でした。

不幸なことに、プスパディが精神病になりました。彼女は、日に日に狂暴になりました。ほかの使用人は、すでに仕事をやめていました。プスパディは、理由もなしにわたしを棒でうちました。わたしは激痛にたえました。彼女はわたしを育ててくれた恩人で

2 カタはインドの地積の単位。1 katha ≒ 66.88㎡。

す。わたしにとって母のような人でした。実際、わたしは彼女を「育ての母」と思って敬愛していました。わたしは狂気になってしまった彼女を、ほんとうに気の毒に思いました。ララ・バブは、ついに自分の手におえなくなり、彼女を精神病院に入院させました。しかし、プスパディは二度と帰宅しませんでした。わたしはララ・バブが気の毒で、なんとか彼の役にたちたいと思いました。しかし、わたしは仕事をつづける気力をなくしてしまい、ララ・バブに暇をもらいました。そのとき、わたしは19歳でした。

5-4. 結婚

犬を散歩させる途中のシュバシパリ村で、ときどき元気のない少女を見かけました。彼女はヤシの葉でかこいをした粗末な小屋のベランダに、いつも横たわっていました。彼女は小柄なかわいい少女だったのですが、まわりの人は、元気のない彼女のことを「ブリ」(ばあさん)と呼んでいました。

そうこうするうちに、わたしは彼女と顔なじみになりました。わたしは元気のない彼女に、「ご飯は食べたか」と挨拶がわりにたずねたのですが、彼女はいつも「食べてない」とこたえるのでした。ポケットに小銭をもっているときには、「これで何か食べろよ」といって、彼女にその小銭を与えたものでした。いずれにせよ、わたしはいつも、「がんばれ！ 元気をだせ！」と声をかけて、彼女を励ましたものでした。

ララ・バブの家事使用人の仕事をやめたあと、数日間、わたしはまったく外出をしませんでした。わたしが家にてブリに会う機会がなかった間に、彼女は病気になりました。そして、彼女の父と兄がわたしの家にやってきました。彼らは、ブリが原因不明の高熱におかされて食欲もないと説明し、心安い医者を知っているかとたずねました。わたしは、ララ・バブの同僚の付属病院の医師を何人も知っていました。わたしは彼らを、名医と評判のシャンカール先生の家案内しました。先生は患者の病状をきいたあと、わたしに錠剤をくれました。そして、すぐに彼らの家に戻りました。

ブリはベッドで寝ていました。肩で息をし、今にも死にそうでした。わたしはブリのそばにいき、彼女の頭に水をふりかけ、「ブリ、大丈夫か。おまえのために薬をもらってきたぞ」と、声をかけました。わたしを見るやいなや、彼女はにっこりと笑いました。そして不思議なことには、薬ものまないのに、病気は一瞬のうちになおってしまったのです。

わたしには、ブリがほんとうに病気だったのかどうかよくわかりません。彼女の父と兄は、ブリがわたしに「恋わずらい」をしていたのだといいました。そしてさらに、彼女とわたしを結婚させようとしていました。

わたしは彼らにいいました。「ぼくは今のところ結婚するつもりはないよ。ララ・バブの仕事をやめたので、ぼくは失業中だよ。ぼくには女房のめんどろをみることができ

ないよ。どうかブリにはほかの人をさがしてください」。

わたしの話をきいたあと、ブリの父はわたしを諭すようにいいました。「わたしは貧乏で、娘に持参金をつけて嫁にやることはできません。しかし、女房のめんどうをみることにについて、きみは何も心配しなくてよろしい。娘はまだ14歳だ。きみたちが結婚したあと、5年間、わたしが娘のめんどうをみましよう。その5年間に、きみはきっと何か手職をおぼえるだろう」。

ブリの父の話を聞きながら、ララ・バブがわたしに暗示したことを思い出しました。もし彼が5年間ブリのめんどうをみてくれるのなら、わたしは自動車の運転手になろう。今は運転免許証がないので、たくさんの金を稼ぐことができないが、5年もあれば運転免許証を取得できるはずだ。わたしは自分の可能性にわくわくしてきました。そして、運転手になりたいというわたしの夢を、ブリの父に話しました。彼はわたしに賛成し、できるかぎり援助の手をさしのべる、といって勇気づけてくれました。こうして、わたしはブリと結婚したのです。

ブリの父、つまりわたしの義父は、結婚後「5年間」、わたしの妻のめんどうをみると約束しました。しかし、彼は5年間どころか、「5日間」さえ約束をまもりませんでした。わたしのお金は、結婚式で全部なくなりました。結婚式のあと数日もたたないうちに、わたしは生活費を稼がねばなりませんでした。

5-5. 交通事故

わたしはコンクリート・パイプを製作する工場で働きはじめました。工場には、事務や現場の従業員にくわえて、数人のトラック運転手がいました。わたしは運転手の助手として就職したのです。運転免許証のないわたしの仕事は、要するにトラックに荷物を積んだり降ろしたりすることでした。

わたしの給料は日給制で、賃金は1日につき5ルピーでした。わたしはしばしば遠方の町の得意先への配達まわりもしなければなりませんでした。しかし、助手席から運転手の操縦をずっと観察することができました。そして実際、半年もたたないうちに、運転免許証を取得することができました。経営者は、わたしをトラック運転手として正式に雇用しました。わたしの給料は月720ルピーとなりました。これは当時の月給としてはかなりの金額でした。

工場所所有のトラックは旧式のおんぼろ自動車で、どれもこれもひどい状態でした。新しい部品なしに修理するために、あのトラックの部品をこのトラックへというように、ある種の「つぎはぎ細工」をしなければなりませんでした。

ある日、わたしは工場へ砂を運搬していました。砂の採取場からの道は、オジョイ川の土手と平行していました。いつものように、トラックは積載量をかなりオーバーして

いました。突然、トラックは制御がきかなくなって道路からとびだし、街路樹につっこみ、それを何本かなぎたおしました。そのあとトラックは、ゆっくりと空中で回転し、そのまま地上に墜落しました。おぼえているのは、ここまでです。

意識が回復したのは、病院のベッドでした。わたしは救急車で病院に搬送され、治療を受けているのだと、やっと気づきました。しかし、わたしは身うごきができず、何も見ることができませんでした。わたしの体はギブスで固定され、顔面には包帯がまかれていたからです。わたしは6週間も入院しました。骨折は回復しましたが、わたしは右目を失明しました。

事故が発生したのは、わたしの不注意な運転のせいではありません。事故の原因は、走行中のトラックのどこかのピンが折れたか、あるいは外れたからであって、トラックそのものの欠陥によるものです。経営者は、見舞金として500ルピーくれました。しかし企業としての工場は、わたしが仕事に右目を失明したことに対して何の保証もしてくれませんでした。わたしは工場をやめました。交通事故にあったのは、わたしが21歳のときでした。

5－6. 準備期間

交通事故のすぐあとに、長男が生まれました。父親になったというのに、ちっともうれしくありませんでした。事故で片目を失明したわたしは、意気消沈し働く気力がわいてきませんでした。ブりはわたしに、二度と自動車の運転をするなと要求しました。わたしは彼女に同意しました。わたしは彼女を寡婦にしたくない。ゆううつな日がつづきました。しかし、わたしにはのんびりとしている余裕はありませんでした。生活費を稼ぐために、とりあえずリクシャー(自転車型の人力車)の車夫になりました。リクシャー屋の親方から、1日4ルピーでリクシャーを賃借しました。料金収入と賃借料の差額が1日の稼ぎです。しかし、パンクの修理などメンテナンスの費用は、車夫が負担しなければなりません。リクシャーの車夫はだれにでもできる仕事ですが、小柄なわたしには重労働でした。

リクシャーのペダルを踏みながら、「わたしに何ができるのか」「わたしは何がしたいのか」と、いつも考えていました。あれこれと考えた結果、わたしはバウルになろうと決心しました。ララ・バブの家に住みこんでいたころ、バウルがマドゥコリにやってきました。わたしはよろこんで彼らの歌を聞きました。彼らのように、歌をうたいマドゥコリをして生活しようと思いました。わたしの歌を聞きたいと思う人がきつといるはずだ、と思いました。

パウルの弦楽器「グブグビ」³を自分で作りました。家の近くに、ちょうど手ごろなヤシの木が、落雷にうたれてそのまま放置されていました。それを適当な長さに切断し、何日もかかって中をくりぬきました。あとは楽器屋に革をはってもらい完成しました。さっそく練習をはじめました。しかし、それをひとりで練習するのは無理でした。まず基本を、音楽教師について習わなければならないと気づきました。

タルトール村のシブ・ダシュが名のりをあげてきました。彼とはそれほど親密ではありませんでした。しかし、彼がヴィシュヴァ・バーラティ大学の庭師で、ときどきシュバシパリ村のだれかの家で、大声でうたっているのを知っていました。シブ・ダシュは、わたしにいました。「おれは庭師の仕事をしているので、金には困っていない。週末に、おれは無料で教えてやるよ。ところで、おまえはレッスンのあと、どんな食べ物を提供してくれるのだい」。わたしは、彼が希望するものを提供するといいました。すると、彼はわたしに、焼ちゅうのバングラを1本ほしいと要求しました。当時、バングラ1本の値段は6ルピーでした。わたしは、高い月謝だなど思いましたが、彼の要求どおりバングラを1本、レッスン後に提供することに同意しました。

シブ・ダシュは毎週火曜日の夕方にやってきました。ヴィシュヴァ・バーラティ大学は水曜日が休日なので、火曜日が彼の週末なのです。しばらくして、わたしは、彼が「元バウル」だということを知りました。いずれにせよ、彼はわたしにグブグビの演奏のしかたを、「テレ・ケテ・ケテテ」や「ディダ・ディク・ティン」など基本的なリズムから教えてくれました。彼はパウルの歌だけでなく、ベンガルの民謡もよく知っていました。彼が1曲うたうごとに、わたしは歌詞をノートブックに書きこみました。わたしのノートブックは、またたく間にそれらの歌でいっぱいになりました。このようにして、わたしはシブ・ダシュからグブグビの演奏法と歌をならったのです。わたしは徐々に自信がついてきました。

25歳のとき、わたしはリクシャーのペダルを踏むのをやめ、パウルの道の第一歩をあゆみだしました。わたしはマドゥコリの生活をはじめたのです。

5-7. 最初の「ファンクション」⁴

ある日、わたしはパンパス駅の近くの村々でマドゥコリをしました。しかし、その日はたくさんの喜捨を集めることができませんでした。ビラ村の池に隣接してマンゴー畑がありました。マドゥコリのあと、わたしはマンゴーの木の下にすわり、ノートブックをひろげて、小さな声で歌詞を口ずさんでいました。

3 グブグビ (gubgubi) は、左わきに抱えてピックではじく二弦の楽器。コモック (khamak) ともいう。

4 「ファンクション」とは、社会的・宗教的な行事や祭典で催される音楽会のこと。

ふとノートブックから目をそらしたときに、ふたりの紳士が自転車でとおりすぎようとしていました。彼らはわたしの姿に気づいてとまり、自転車のサドルに腰かけたまま、なにか相談していました。もちろん、わたしには彼らの声はきこえませんでした。彼らは自転車からおりて、こちらに近づいてきました。そして、わたしに尋ねました。

「きみはどこから来たのかね」。

「わたしはシャンティニケートンに住んでいます」。

「ところで、きみはここで何をしているのね」。

「わたしは、ここに座っているだけです」。

「なぜ、ここに座っているのかね」。

「この近くの村でマドゥコリをしたあと、すこし休憩しているのです」。

「なるほど。きみは村びとから喜捨を受けとった。それでは聞くが、きみは村びとに、喜捨の返礼として何を与えたのかね」。

「わたしはグブグビを演奏し歌をうたいました」。

「きみはバウルかね」。

「わたしはバウルの道を歩んでいます」。

「きみはバウルの歌がうまいのかね」。

「まあまあです」。

「ところで、きみは自分の音楽チームをもっているのかね」。

「はい、もっています」。

しかし、これは事実ではありません。わたしは自分の音楽チームをもっていませんでした。しかし、わたしの返事をきくやいなや、彼らはわたしに、一緒に来ていただきたいといいました。そして、紳士のひとりが、わたしを自転車の荷台に座らせました。わたしは、このあと何がおこるのかと心配しました。彼らは、「ゴヴィンダ・タラー」（クリシュナ神の部屋）と呼ばれる集会場に、わたしを連れて行きました。

ふたりの紳士は、「ここで、すこしお待ちください」といって、集会場のなかに入って行きました。まもなくふたりの紳士は、入り口で待っていたわたしを集会場に招き入れました。集会場では、数人の紳士がにこやか談笑していました。

紳士のひとりが、わたしに尋ねました。

「明後日、わたしたちはここで集会をひらきます。そのとき、きみは自分の音楽チームと一緒に歌をうたうことができます。わたしたちは、すばらしいバウルの歌をききたいと思っています。きみは出演料としていくらほしいですか」。

「もし250ルピーいただけるなら、わたしは自分の音楽チームを連れてきましょう。わたしたちは、すばらしいバウルの歌をみなさんのために演奏いたします」と答えました。彼らはそのことに同意しました。

「それでは、きみがどの程度うたえるのか、ひとつ聞かせてもらえませんか」と、彼らはいいました。わたしは1曲うたいはじめました。「三途の河原で、何がみえたか。孔雀がおどる、蛇と蛙のように……」。彼らはさらにもとめましたので、わたしは2曲目をうたいました。「五体満足に生まれたけれど、わたしは人間になれなかった。何という運命が、わたしをまちうけていたのか。ああ、神よ！ わたしにはさっぱりわかりません……」。

2曲目をうたい終わったときに、お茶がはこばれてきました。お茶をのみながら、紳士のひとりが、わたしにいいました。「わたしたちの約束の証拠金として、今、きみに5ルピーお支払いしましょう」。

しかし、わたしはいいました。「わたしは演奏の前に、いっさいお金をいただきません。しかし、もしわたしたちの合意について紙に書いてくださるなら、わたしはそれをいただきます。わたしは演奏終了後に、約束のお金をいただきたいと思います」。彼らは納得していいました。「わかりました。それでは、明後日の夕方6時まで、ここに来てください」。

さて、わたしは「自分の音楽チーム」の手配をしなければなりませんでした。翌朝、わたしは、シタランプール村のミヒール・ダシュ・パウルを訪問しました。彼は歌がうまく、彼自身の音楽チームをもっていました。わたしは彼に、もし音楽チームこみで演奏するなら、出演料としていくらほしいかとたずねました。彼は150ルピーもとめ、わたしはそれに同意しました。「わたしたちは『タラピイティ・パッセンジャー』に乗車しなくてはなりません。明日、午後3時に、プランティック駅に集合してください。お願いしますよ」と念をおして、彼とわかれしました。

わたしの急ごしらえの「音楽チーム」は6人編成でした。ミヒール・ダシュ・パウル、ミヒールの弟のカシ・ダシュ・パウル、太鼓奏者、ハルモニウム奏者、竹笛奏者、そしてわたしでした。

この演奏旅行の場合、音楽チームのリーダーはミヒール・ダシュですが、契約はわたしを通じてです。したがって、演奏旅行の必要経費、たとえば交通費、お茶代、そして数パックの「ビリー」（小型巻たばこ）代などは、わたしが負担しなくてはなりません。しかし、わたしにはそのお金がありませんでした。わたしは、家の台所に備蓄されていた3キロの米を売却し、真ちゅう製の食器皿を質に入れました。こうして、わたしは旅行に必要な金額をなんとか都合しました。

わたしたちは、5時頃に会場につきました。ふたりの紳士は手をふってわたしを歓迎してくれました。彼らのひとりが、わたしに50ルピーわたそうとしました。そのお金は前金だと思いました。

「いいえ、それはいけません。お金は演奏が終了してからいただきます」。

「いいえ、誤解しないでください。総額の250ルピーはそのままです。このお金は、あなたへの祝儀です」。

わたしは納得し、ありがたくいただきました。お茶と「ムリ」（米を煎った軽食）がはこばれてきました。会場に人が集まってきました。開演の6時半には満員の聴衆となりました。わたしたちは夜10時まで演奏しました。演奏のあと、彼らはわたしたちに食事をふるまってくれました。その夜、わたしたちはそこに一泊しました。ふたりの紳士はわたしに合計300ルピーくれました。わたしはミヒール・ダシュに150ルピーわたしました。そして150ルピーが、わたしの手元にのこりました。人生最初の「ファンクション」は大成功でした。

わたしは、音楽チームを組織するのは利益になるビジネスだと思いました。実際、何度か音楽チームを組織したことがありました。しかし、わたしが音楽チームのリーダーシップをとれるようなタイプの人間ではないと、すぐに気づきました。先輩バウルにうまく対応するのはむずかしいことで、苦い経験もしました。わたしは、音楽チームを二度と組織してはならないと自戒しました。わたしは金もうけをするためにバウルの道を歩むようになったのではない。わたしにはマドゥコリの生活のほうがふさわしい。わたしは「10ルピー・バウル」なのですから。

6. いなかバウル

6-0. はじめに

シヨナトン・ダシュ・バウル (Sanatan Das Baul) は、1923年生まれ of 老バウルである。彼の愛用のエクターラには、「いなかバウル」（グラメール・バウル）と書かれた小さな布きれが、誇らしげにはりつけられている。これは、彼の活動の中心がカルカッタのような大都会ではなく、ベンガルのいなかの村々である、という彼の自負を表明したものである。実際、彼の住むバンクーラ県のコエルブニ村は、バスや鉄道の路線からはずれた、辺ぴな村である。そこは雨季には道がぬかるみ、リクシャーも入れないようなところである。

しかし、この自称「いなかバウル」は、今日もっとも有名なバウルのひとりである。彼はバウルの歌やダンスがじょうずなばかりではなく、バウルの宗教や儀礼にも精通している。しかし彼にとっては、音楽的技量や宗教的知識に卓越したバウルになるのは容易な道のりではなかった。以下は、自称「いなかバウル」の物語である。

6-1. 少年時代

わたしは東ベンガルのクルナ県のラクプール村で生まれました。わたしの父はバウル

でした。3歳のとき、わたしは家族とともに西ベンガルにやってきました。父は、チョイトンノ（チャイタニヤ）の生誕地ナヴァドヴィップで「ラーシュ・ジャートラ」という祭を見物したかったのです。ラーシュ・ジャートラは、クリシュナとラーダーの踊りを祝う祭典で、カルティック月（10中旬～11月中旬）の満月の夜に行われます。しかしどういうわけか、父は祭が終了したあとも、東ベンガルに帰ろうとはしませんでした。わたしたちは西ベンガルだけでなく、各地の聖地をたずねて旅行しました。プリー⁵、ガヤー⁶、ヴリンダーヴァン⁷、マトゥラー⁸などの聖地です。そして最終的に、わたしたちは西ベンガルのフーグリ県のマグラ近くの村に定着しました。そのとき、わたしはすでに5歳でした。わたしたちの聖地巡礼の旅は2年間もつづいたのです。

旅にでる前、わたしたちは祖父母と同じ屋敷地に住んでいました。別棟に住む父母は年子の弟の世話にいそがしく、わたしはずっと、母屋の祖父母と寝食をともにしていました。聖地巡礼の旅行中も、わたしは祖父母が恋しくてたまりませんでした。フーグリに定着してからも、わたしは祖父母に会いたいと両親にせがみました。ついに父は、ちょうど東ベンガルのクルナ県に出かけようとしている知人に、ラクプール村の祖父母のもとに、わたしを送りとどけるように頼んでくれました。こうして、わたしは14歳まで祖父母と住むようになったのです。

祖父は、野外で上演されるオペラ的一种で、クリシュナ神の一生を再現する「クリシュナ・ジャートラ」一座の興行主でした。祖父の一座は「少年音楽隊」と呼ばれていました。少年音楽隊は、その名のとおり、声変わりする前の少年たちによって編成されていました。

祖父はたくさんの歌を知っていました。クリシュナとラーダーの物語を詠唱する「キールタン・ガン」や、もともと船頭によってうたわれた「パティアリ・ガン」などを、次々と教えてくれました。また芝居の演技かたも教えてくれました。わたしは芸事の勘がよく、祖父の教える歌や芝居の「こつ」をすぐにつかみました。7歳か8歳のころには、わたしは祖父の一座で、もっとも歌のうまい歌手であり、芝居のじょうずな俳優でした。

わたしが13歳か14歳のころ、祖父は一座を運営するのに苦労するようになりました。当時の東ベンガルは騒然としていました。ライオット（暴動）がおこると公演はただちに中止されました。近隣の村々からの公演依頼は見ているうちに減少しました。祖父は、

5 プリー：インド東部、オリッサ州のベンガル湾に面する宗教都市。ジャガンナート寺院の所在地。

6 ガヤー：インド東部、ビハール州中部の宗教都市。ヴィシュヌ神をまつるヴィシュヌ・パド寺院の所在地。もともと仏教の中心地であったが、2～4世紀にヒンドゥー教にとってかわられた。

7 ヴリンダーヴァン：インド北部、ウッタールプラデーシュ州西端にあるヒンドゥー教の聖地。首都デリーの南約130km。ヴィシュヌ神の第8番目の化身とされるクリシュナ神がこの地に現われ、数々の徳をほどこしたとされる神話で有名。

8 マトゥラー：デリーの南約140km、聖河ヤムナー沿いにある古都。北隣のヴリンダーヴァンとともに、クリシュナ神話・信仰の聖地ブラジャ地方の中心都市。

以前なら辞退していた遠方の村からの公演依頼も、無理をして受諾するようになりました。そのような場合には数日の巡業となってしまいます。しかし、一座のメンバーのほとんどは小作人階級の子どもたちです。彼らは、それぞれ自分の家でしなければならぬ日課があります。

ある日、メンバーの父親が祖父のところにやってきました。「ゴサーイ（師匠）。おまえさんが自分の一座を巡業するのはいいけれど、家畜の世話はいったいだれがするのだい。おまえさんは、うちのウシやヤギも巡業に連れて行ってくれるのかい」と、いいました。そして、一座のメンバーが、ひとりまたひとりと退団しました。ついに祖父は、ある村からの公演依頼を受諾していたにもかかわらず、一座を巡業させることができませんでした。

祖父は、「孫よ。困ったことになった。一座を維持するのがむずかしくなった。いったい、どうしたらいいと思うかね。」と、わたしに相談しました。わたしは、「こんな危険な仕事はやめたほうがよい」と進言しました。当時、東ベンガルではライオットがあちこちで発生していました。そのたびに多数の死者がでました。わたしは、父母の住むフーグリに帰ろうと思いました。西ベンガルでは、まだライオットが少ないと聞いていたからです。

フーグリに帰る列車のなかで、ひとりの盲目のバウルと知りあいました。彼はアナンタ・カナ・ダシュと名のついていました。彼はじょうずな歌手ではありませんでしたが、すばらしい「ドターラ」奏者でした。ドターラは、「二弦」という意味ですが、実際には四弦の音色の美しい楽器です。わたしは彼のドターラの腕まえにすっかり魅了されてしまい、しばらく彼と一緒に行動をすることにしました。昼間は、列車や町で稼ぎました。わたしが歌をうたい、彼がドターラで伴奏をしました。夕方には、わたしは盲目の彼のために料理をし、夜には彼がわたしにドターラの演奏を教えてくださいました。彼とは2ヵ月ほど一緒だったと思います。その間にわたしのドターラの腕まえもずいぶん上達しました。

父と再会したのは9年ぶりでした。驚いたことに、父はバウルをやめて商人になっていました。香辛料をあつかう店を経営していたのです。父の店はけっこう繁盛していました。しかし、父のグブグビはほこりをかぶり、ドターラの金具はさびついていました。父の変身はショックでした。しかし、「これは父の人生なのだ。父の人生は、世の中のさまざまな人生のひとつなのだ。それはそれで、他人がとやかくいう問題ではないのだ。」と、思うようになりました。

わたしはプロの歌手として徐々にみとめられるようになりました。何人もの興行主が、一緒にやらないかと勧誘にきました。わたしは音楽では多芸でした。パティアリ・ガン（船頭の歌）やキールタン・ガン（クリシュナとラーダーの物語の歌）だけでなく、ラー

マヨン・ガン（叙事詩ラーマヤナの物語の歌）など、どんなリクエストにも即座に応じることができました。

わたしはソロの歌手としては自信があったのですが、ほかの演奏者と一緒のときは、彼らとの人間関係に苦労しました。わたしは伴奏が気にいらなければずけと文句をいってしまいます。たまにはお世辞のひとつもいわなければならないのですが、わたしにはそれができないのです。わたしはほかの演奏者から孤立してしまいました。彼らはわたしの伴奏をするのを拒否するようになったのです。そのとき、わたしは16歳になっていました。

6-2. 祖父の助言

わたしは、歌手としてのわたしの将来を相談するために、東ベンガルの祖父をたずねました。祖父にあうのは2年ぶりでした。わたしは、歌手としての能力には自信があるが、伴奏者との人間関係については自信をなくしたと、祖父に話しました。祖父はわたしの話を聞いて、しばらく考えていました。そして、ゆっくりとした口調で、わたしに助言を与えてくれました。

「偉大なロビ・タクール（詩人タゴール）の影響で、パウルの歌と音楽が再評価されている。もしおまえがひとりで演奏したいのなら、パウルの歌をためしてみなさい。足首につけたグングール⁹は、リズムをとるのにもっとも便利な楽器だ。おまえはエクターラを片手で演奏できる。しかし、一弦のエクターラの音量はおおきくないので、腰にゆわえたドゥギ¹⁰を、もう片方の手で演奏して、ふたつの楽器を一对としなさい。あるいは、エクターラとドゥギにかえてグブグビかドターラで、おまえの歌におまえ自身が伴奏しなさい。これらはパウルの音楽にとって基本的な楽器だ」。そして祖父は、彼の愛用のエクターラとドゥギをくれました。祖父はさらにつづけていました。

「愛する孫よ。わたしのいうことを注意して聞きなさい。パウルは、パウルの歌をうたいパウルの音楽を演奏している。しかし、彼らは単なる音楽家ではないのだよ。彼らを注意ぶかく観察してごらん。彼らは宗教的な「こじき」なのだ。マドゥコリの生活はパウルの宗教的義務なのだ。このことを、しっかりと心にとどめておきなさい。そして、パウルの歌が何を語りかけているのか、よく考えなさい」。

祖父の話を聞いているあいだに、ドターラの演奏法を教えてくれた盲目のパウルと、パウルをやめて商人となった父のことを、かわるがわる思いだしました。わたしは祖父の助言にしたがって、パウルになろうと決心しました。

9 グングール：いくつもの鈴を数珠のようにひもで連ねた楽器。

10 ドゥギ：半球形の陶器に革をはった小さな太鼓。

6-3. ブラジャバシ

父の家の近くにヴィシヌ派の寺院がありました。散歩の途中、しばしばその寺院をたずねました。そして、ときどき寺院で礼拝しているりっぱな導師を見かけました。わたしは、その師のお名前がナンダ・ゴパール・ゴスワミ師であること、師はふだんウツタルプラデーシュ州のヴリンダーヴァンに住んでおられること、師はヴィシヌ派の導師¹¹としてときどきこの寺院に来られること、人びとが師のことを「ブラジャバシ」と呼んで尊敬していること、そして師はたしかにりっぱな方だということを知りました。

わたしは師に、わたしの家族はボイシュナブ（ヴィシヌ教徒）であること、わたしがバウルになりたいという希望をもっていることを話しました。そして、師にディッカ（入門式）を受けたいと、お願いしました。そのとき、師はいわれました。

「きみは結婚しているのかね」。

「いいえ、していません」。

「もしきみが生涯結婚をしないなら、きみはこの宇宙の歴史を永遠に理解できないだろう」。

さらに、師はいわれました。

「もしきみが宇宙の歴史を理解したいとのぞむなら、結婚をして妻と一緒に永遠の礼拝をしなければならない。結婚後は、きみのシッカ・グルからクリシュナの霊的な愛と、クリシュナとラーダーのリラー（神の遊戯）を学びなさい」。

そのとき、わたしには師のことばが理解できませんでした。しかし、師はわたしに入門を許し、わたしに「ショナトン・ダシュ・バウル」という名前をつけてくれました。そのとき、わたしは17歳でした。それ以後、わたしは自分自身をバウルと名のり、ゲルア色（黄土色）のバウルの衣装を身にまとい、バウルのような生活をはじめました。村から村へと放浪し、歌をうたいながら一軒一軒マドゥコリをして生活をするようになったのです。

6-4. 結婚

ブラジャバシは、ヴィシャカ・ボイシュナビというヴィシヌ派の女性行者と懇意でした。彼らは「共謀」して、わたしの結婚をまとめようとしていました。彼らは「8歳の少女」の花婿として、「28歳の男性」を選んだのです。

その少女が生後6週間の乳児のとき、彼女の母は毒蛇にかまれて死にました。彼女の父は、ヴィシヌ派の男女の行者、すなわちヴィシャカ・ボイシュナビとクリシュナ・ダシュのアーシュラムに、赤ん坊のミルクがほしいと懇願しました。アーシュラムでは

11 「(クリシュナが幼年時代をすごした) ブラジャ地方に住む導師」という意味。

数頭の牛を飼育していたのです。彼らは赤ん坊にミルクを与え、母親がわりに世話をしました。しかし、不幸なことに、その子の父親も急病で死にました。行者はこの乳児を養女にし、育てることにしました。しかし、その子が6歳になったとき、男性行者のクリシュナ・ダシュが死にました。

ヴィシャカ・ボイシュナビは、その当時、初老の女性でしたが、けっして老婆ではありませんでした。クリシュナ・ダシュの死後、おそらく彼女は養女の将来だけでなく、自分の老後のことも心配になったのだと思います。その問題の解決策として、彼女は養女の結婚をまとめることにしました。彼女のアーシュラムで「同居してもよいという花婿」をさがしはじめたのです。彼女はブラジャバシなどに相談したようです。いろいろな経過をへて、彼女は養女の花婿候補としてわたしを選んだのです。そして、バルドマン県のチャクナーラ村のアーシュラムへ視察をかねて来訪してほしいと、ブラジャバシを通じてわたしに要請してきました。

わたしは、友人を同行してそのアーシュラムを訪問しました。ヴィシャカ・ボイシュナビは、「できるだけ長いあいだ、ここに滞在してくださいね」と、わたしたちを心から歓迎しました。わたしたちはそこに3日間滞在しました。昼間には、歌をうたいながら村中の家を一軒一軒マドゥコリし、その村を観察しました。

2日目の夕方、同行の友人が感想をのべました。「あの少女と結婚しろ。あの子はかわいいじゃないか。母親もかなりの年だ。アーシュラムもわるくないぜ。おまえにとつては、すべての点で満足できるのではないかと思うよ」。

3日目に、わたしはこの縁談について口火をきりました。

「マー・ゴサイ。もしわたしがあなたの要求を満たす人物なら、わたしは彼女と結婚することに同意します。ただし、ひとつだけ条件があります」。

「息子よ！ わたしが探していたのは、あなたのような男性です。わたしはあなたが要求するどんな条件にも同意します」。

「わたしはパウルです。わたしは常に自由でありたい。わたしは、どこかにいきたいと思えば、それがどこでも、すぐに出かけたい。どうか、わたしが常にここにとどまっているとは思わないでください。わたしには、それはできません」。

彼女はわたしに同意しました。そして、結婚式は1951年のスラボン月（7月中旬～8月中旬）におこなわれました。スラボン月は「ジュラン・ジャートラ」¹²のある月です。わたしは、ビシャカ・ボイシュナビがほんとうにわたしのつけた条件に同意しているのかを、確かめてみたくなりました。婚礼の数日後、わたしはビシャカ・ボイシュナビにいいました。

12 「ジュラン・ジャートラ」は、クリシュナとゴピーたちのブランコ遊びを祝福する祭典。

「ジュラン・ジャートラを見物したいので、ヴリンダーヴァンに行こうと思います」。

「あなたに約束したとおり、あなたはどこにでも行けますよ」。

「ヴリンダーヴァンには、妻のミラを連れて行こうと思います」。

ビシャカ・ボイシュナビは驚いて、一瞬たじろいだようすでした。

「連れて行くのはいいけれど、あの子はまだ小さな子どもなのよ。子どものあつかいになれていないあなたに、あの子のめんどうを見ることができますか。ヴリンダーヴァンのような遠いところへの巡礼は、道中きびしいことがおこるのがふつうなのですよ」。

「わたしは旅なれているのでだいじょうぶです。もし何かあっても、わたしが責任をもって処理しますから」。

ビシャカ・ボイシュナビは、それ以上なにもいいませんでした。さっそく翌日に、わたしはミラを連れて出発しました。チャクナーラ村からラシュルプール駅まで歩き、そこからローカル列車でバルドマンに行きました。バルドマン駅で「デリー・エクスプレス」に乗り換えマトゥーラ駅まで行きました。そこからはバスでヴリンダーヴァンへ行きました。

ヴリンダーヴァンに到着したとき、わたしは3ルピーの現金と約2キロの米と約1キロの小麦粉をもっていました。お金や食料がなくなれば歌をうたって稼ごうと、愛用のドターラを持参していました。

この旅は、ビシャカ・ボイシュナビが予想したように困難の連続でした。ヴリンダーヴァンは、ジュラン・ジャートラ見物が目的の巡礼者であふれかえっていました。わたしはミラの手をひいて歩くのですが、彼女は人ごみにくたびれて、すぐにぐずりだします。わたしはミラを抱きかかえたり、肩車をしたりしてあやしました。ヴリンダーヴァンには数日滞在しただけなのですが、わたし自身もすっかり疲れてしまいました。

帰路のマトゥーラからの列車は、たいへん混雑していました。お金も食料もなくなっていました。列車のなかで歌をうたって稼げるような状態ではありませんでした。しかも列車は大幅におくれ、パトナ駅に到着したときは深夜でした。わたしはパトナで列車を乗り換えようと、ぐったりしているミラを抱きかかえて待合室に行きました。わたしたちは朝からなにも食べていませんでした。しかし、歌をうたって稼ぐには時間がわるい。待合室のほとんどの旅客は、ベンチや床で寝ていました。わたしも疲れていたのでも眠ろうとしたのですが、なぜか目がさえて眠れませんでした。

ひとりの紳士が、わたしのドターラを見て、ヒンディー語で話しかけてきました。

「サードゥー・ババ。ラーマ・バジャン¹³をご存じですか」。

「ええ、少しはね」と、わたしもヒンディー語でこたえました。

13 インドの大叙事詩『ラーマヤナ』の主人公ラーマの活躍を題材にした歌。

「それはいい。ご存じなら、どうぞうたってください。わたしはあなたのラーマ・バジャンを聞きたいと思います」。

わたしが、よろよろとドターラをかかえて、ラーマ・バジャンをうたいはじめようとしたとき、その紳士がいました。

「サードゥー・ババ。失礼ですが、食事はお済みですか」。

「いいえ」。

わたしは、わたしたちがヴリンダーヴァン巡礼の帰路であること、マトゥーラからの列車が身うごきできないほど混雑していたこと、列車がおくれパトナに到着したのが深夜になったこと、したがって歌をうたって稼ぐことができなかったことなどを、正直に話しました。それを聞いて紳士は、「わかりました。ちょっとお待ちください。」と、待合室から出ていきました。

まもなく紳士は「ルチ」¹⁴と「シンガラ」¹⁵をかかえて、待合室に帰ってきました。「どうぞ、まずは召し上がってください」と、それらを提供してくれました。そして、お茶売りをよびとめ、ミルクティーをふるまってくれました。ごちそうになったあと、わたしは数曲のラーマ・バジャンをうたい、その紳士とわかれしました。

わたしたちは、バルドマン経由ハウラー行きの列車に乗車し、朝までぐっすりと眠りました。バルドマンからローカル列車に乗り換え、ラシュルプール駅に到着したのは昼すぎでした。まず茶店にはいり、店の主人にビシャカ・ボイシュナビの「娘婿」のショナトン・ダシュであると名のり、代金はあとで持参するので、ミラに何か食べさせてほしいと懇願しました。店の主人は、ビシャカ・ボイシュナビの名前をきくと、「ああ、あなたがビシャカ・ボイシュナビの義理の息子さんですか。」と、すっかり信用してくれました。わたしは、この地域における彼女の信用が絶大であると感じました。そして、ビシャカ・ボイシュナビを疑って、ミラを連れてヴリンダーヴァンに出かけたことを恥ずかしく思いました。

ヴリンダーヴァン事件以後、わたしはビシャカ・ボイシュナビのアーシュラムに腰をおちつけるつもりでした。しかしわたしは、人びとがわたしのことを「ゴル・ジャマイ」と呼ぶのではないかと、心配になってきました。「ゴル・ジャマイ」というのは、「妻の実家に居候をきめこんだ男」のことです。「ゴル・ジャマイ・ショナトンは、財産目あてに少女と結婚した」と風評が立てば、わたしには耐えがたい屈辱です。

わたしは、ブラジャバシとビシャカ・ボイシュナビの「共謀」にまんまとのってミラと結婚し、ビシャカ・ボイシュナビのアーシュラムに同居したことを後悔しました。わ

14 ルチ：小麦粉を練ってバターで煎餅状にあげたパン。

15 シンガラ：小麦粉を練った皮のなかに野菜や肉をつめて油であげた軽食。

わたしは一刻もはやく、どこかへ移住したいと思いました。

6-5. コエルブニ村

1952年のファルグーン月（2月中旬～3月中旬）のことです。「ゴシュパーラ・メラ」¹⁶の会場で、わたしはバンクーラ県のコエルブニ村の人たちと出会いました。彼らはわたしの歌をたいそう気に入って、わたしにいいました。

「コエルブニ村のアーシュラムの祭が、ゴシュパーラ・メラの5日後に開催されます。わたしたちのアーシュラムで、あなたの歌をもう一度きかせてください。お待ちしています」。

わたしは彼らの要請にこたえて、約束の日時にコエルブニ村を訪問しました。彼らはわたしを心から歓迎してくれました。アーシュラムの祭が終了し、彼らと挨拶をかわしているときに、彼らはいいました。

「ショナトン・ダ。わたしたちの村に引っ越しませんか。あなたはこのアーシュラムで何の不自由もないでしょう。あなたはこの村だけでなく、近所の村々でも歌をうたいマドゥコリをすることができますよ。村びとたちは、きっとあなたの歌を好きになるはずですよ。どうぞ、ここに家族を連れて来てください」。

わたしは、コエルブニ村に移住しないかという提案に、興味をそそられました。わたしはビシャカ・ボイシュナビのアーシュラムに戻り、彼女に詳細を説明しました。そして、彼女を彼らのアーシュラムに連れて行きました。

彼女はアーシュラムをみて、「まあ、なんてすてきなところなのでしょう。ここはサマジ・バリ（共同体施設）なのね。わたしたちは、今まさにこの共同体の活動に参加しようとしているのね。」と、いいました。こうして、わたしたちはコエルブニ村のアーシュラムに住むようになったのです。

約1年間、わたしたちはそのアーシュラムで生活しました。しかし、どういうわけかアーシュラムのオーナーはわたしを誤解し、わたしに腹をたてました。彼は、わたしが誤解をとこうと釈明すると、弁解ばかりしていると、また怒りだす始末です。わたしたちの関係はすっかりこじれてしまいました。わたしは彼のアーシュラムに住むのはもはや困難と判断し、ビシャカ・ボイシュナビのアーシュラムに戻ることにしました。しかし、わたしたちが出発するその日の朝に、村びとがやって来て、みんなでわたしを引き止めたのです。

「ショナトン・ダ。わたしたちはあなたの歌が大好きです。あなたにこの村にいても

16 ゴシュパーラ・メラは、19世紀の初期にベンガルで成立した新興宗教「カルタバジャ派」の祭典で、大きな市がたつ。

raitai. この村には、だれも使用していない土地があります。その土地はわたしたちのもです。あなたはそこに、あなたのアーシュラムを建てることができます。わたしたちは現金をさしあげることはできませんが、その敷地と必要な建材を提供することができます。それでは不十分ですか」。

もちろん、わたしは彼らの提供を、よろこんで受けいれました。そしてすぐに、壁土をはこぶための牛車を借用しました。彼らは、材木や竹、わら、建具や金物などの建材を無償で提供してくれました。それは粗末な泥壁の小屋でしたが、わたしは、自分のアーシュラムをもつことができたのです。そしてわたしは、コエルプニの村びとたちのおかげで、名実ともに、「ゴル・ジャマイ」と呼ばれる心配から解放されたのです。そのとき、わたしは30歳でした。

6-6. ニタイ・キャパ

1953年は、わたしの人生にとって忘れることのできない年です。わたしは、コエルプニ村にわたし自身のアーシュラムを設立することができました。また、「ショナムキ・モホットショプ」¹⁷にもはじめて参加することができました。そして、わたしにとってより重要なことは、ショナムキ・モホットショプの期間中に、わたしが偉大なニタイ・キャパ (Nitai Khepa) の弟子となったことです。ビシャカ・ボイシュナビが、わたしたちの師弟関係を仲介してくれました。

ニタイ・キャパは、ビシャカ・ボイシュナビの「キョウダイ弟子」でした。ビシャカ・ボイシュナビは、わたしにとって「母のような人物」です。したがって、ニタイ・キャパは、わたしの「ママー」(母の兄弟)でもあるのです。実際、ビシャカ・ボイシュナビが、ショナムキ・モホットショプのような祭の人ごみのなかでニタイ・キャパを見つけたとき、彼女はさげびました。

「ほら、ごらん。息子よ、ごらん。ほら、あそこにわたしのダダー(兄)がやってくる。あの人は、おまえのママーなのよ」。

ショナムキ・モホットショプの期間中、ニタイ・キャパはショナムキ周辺のアーシュラムに、わたしたちを案内してくれました。彼はいくつものアーシュラムに招かれ、歌をうたうように要請されていたのです。わたしはニタイ・キャパの歌にすっかり魅了されてしまいました。はじめて本物のパウルの歌をきいたような気がしました。わたしは彼に、弟子にしてほしいとお願いしました。ニタイ・キャパは、しばらくわたしをじっと見つめ、「よし、わかった。おまえをバウルとして鍛えてやろう」と、わたしを弟子

17 ショナムキ・モホットショプの見ものは、その名のとおりに、目を見張るような「モホットショプ」(宗教的宴会)である。祭の期間中、ショナムキ周辺のヴィシュヌ派のアーシュラム主催の宴会が、次から次へと開かれる。

として受け入れてくれました。

ニタイ・キャパのアーシュラムは、バルドマン県のベタルボン村にありました。わたしはニタイ・キャパに弟子入りして以来、彼のアーシュラムに頻繁に通うようになりました。そのたびに数日滞在するのが常でした。彼のアーシュラムに通うようになって、わたしは大枚をはたいて自転車を購入しました。なぜなら、彼のアーシュラムまで、徒歩では4時間以上もかかるからです。その英国製の自転車は今でも愛用しています。こうして、わたしのニタイ・キャパ通いは、彼が亡くなる1983年までつづきました。

ニタイ・キャパのアーシュラムで、わたしが朝一番にしなければならないことは、ガンジャ（マリファナ）をもみほぐして、朝の一品を用意することでした。師はガンジャが好きで、朝から晩まで吸っていました。ニタイ・キャパと一緒にいるときは、わたしの手のひらに豆ができるほどでした。

ニタイ・キャパのアーシュラムに滞在中、午前中の1時間か2時間、マドゥコリに出かけました。わたしはマドゥコリで稼いだものを二分し、半分を師に与え、残りの半分を自分のものとししました。わたしには扶養家族がいたからです。「マタジ」（「母上」、すなわちニタイ・キャパのパートナー）が食事の世話をしてくれました。しかし、水くみ、まきわり、草むしりなどアーシュラムの力仕事はすべて、わたしがしなければなりませんでした。アーシュラムで飼育していた数頭の牛の世話も、わたしの仕事でした。ときには、師の使い走りもやりました。さらに、師が沐浴するときには、身体や足に油をぬり、マッサージをしました。このような師に対する弟子の義務をすべて終えて、やっと歌を1曲お願いすることができるのです。

歌を教えてもらうとき、ニタイ・キャパはいつも1行か2行を口述し、わたしに筆記させました。わたしはそれをノートブックに書き留めるのですが、なかなか先に進みません。「うーん、次の行を思いだせないな。息子よ。わたしが次の行を思いだそうとしているあいだに、ガンジャを用意しなさい」と、すぐに中断してしまいます。しかし、こうしてガンジャを吸飲し、しばらく休憩をして、またレッスンを再開したものでした。

わたしは、ニタイ・キャパから数おおくの歌を習いました。しかし、彼はきびしい先生でした。1曲の歌を習うのに、しばしば数ヵ月も要しました。彼はわたしの歌に納得するまで、けっして新曲を教えてくれませんでした。彼はわたしがまちがうたびに、わたしをステッキでなぐりつけました。たとえわたしが彼のアーシュラムに到着したばかりでも、わたしの歌に不満があると、わたしをアーシュラムから追い出しさえしました。「そんな下手な歌など聞きたくもない。もう1週間、みっちり練習してこい」。昼夜関係なく、わたしはコエルブニ村に帰らねばなりませんでした。そして、何度もその曲を練習しなければなりませんでした。そして1週間後、彼の前でその曲をうたうのです。数ヵ月のそのようなきびしい練習をへて、ようやく彼は次の曲に進むのでした。

「おまえの歌に満足したわけではないが、まあ、新しい歌を教えてもよいだろう」。

ニタイ・キャパがわたしに教えようとしたことは、ただ歌の歌詞だけではなく、全体としてのパウルの音楽でした。彼がわたしにくりかえし強調したことは、ひと言でいえば、「シュール（節、メロディー）を組み立てよ」ということです。「シュールは歌詞よりも重要なのだ。もしおまえがシュールを把握したなら、おまえはその曲を自動的にうたえるだろう。歌詞はおまえの記憶から自動的にでてくるものだ。息子よ。まずシュールを勉強なさい」。

わたしがニタイ・キャパから学んだことは、「ニタイ・キャパの音楽」です。ニタイ・キャパは、「パウルの音楽」そのものでした。わたしはさらに、足首につけたリズム楽器のグングールをいかに効果的に使用するかを学びました。つまり、彼からパウルのダンスを徹底的に仕込まれたのです。

ニタイ・キャパがわたしを「パウルとして鍛える」といったとおり、彼はパウルの歌や音楽やダンスだけでなく、パウルの宗教の真髄も教えました。彼は「人間の肉体は、真理の容器」というパウルの信仰に言及し、「人間の肉体と宇宙との関係」について説明してくれました。彼はさらに、人間の肉体には、宇宙を構成する五粗大元素、すなわち「地」「水」「火」「風」「空」が、すべて存在すると説明してくれました。

わたしが結婚した少女が成長してくるにつれて、ニタイ・キャパは、パウルの「サドゥナ」（成就法）についても語りました。わたしは懸命に努力しましたが、このサドゥナを首尾よく実践するのはむずかしく、わたしは連続して失敗してしまったのです。わたしが3人の子どもの父親なのは、そのせいなのです。次男が生まれたとき、ニタイ・キャパはわたしにいました。

「息子よ。おまえはヨーガの修行をしなければならない。わたしの親友のところへ、おまえを送りこもう。彼からヨーガをみっちり教えてもらいなさい」。

6-7. モノホル・キャパ

プルリア県のモノホル・キャパ（Monohar Khepa）は、わたしに一連のヨーガを教えてくださいました。それは、「性的エネルギーの制御」のために体系的にくみたてられていました。レッスンは彼の部屋で、ふたりだけでおこなわれました。しかし、このヨーガの「こつ」を身につけるのはむずかしく、わたしはふたたびパウルのサドゥナに失敗したのです。

娘が生まれたと報告したとき、彼はおだやかに、しかしきっぱりといました。

「おまえはまた同じ失敗をしでかした。子どもはもうたくさんだ」。

わたしは、まるでモノホル・キャパに破門されたような気がしました。

「師よ！　どうかもう一度チャンスを与えてください。もしふたたび失敗をしたなら、

わたしはこの宗教を追求するのを断念いたします。わたしがバウルであるとは、けっして主張いたしません」。

わたしは真剣でした。わたしは心の底から、モノホル・キャパにそう懇願したのです。わたしは最初からヨーガを練習しなおしました。

数ヵ月が経過しました。わたしはついに、サドゥナを首尾よく実践する自信をえたのです。ひとつのことを会得するのに、ずいぶん長い年月を要したものです。わたしの報告に、モノホル・キャパはたいそう喜んで、わたしをだきしめて祝福してくれました。

「おお、愛する息子よ。おまえはついに「生と死と、再生の鎖」(輪廻)から解放された。おまえは、たった今、本物のバウルとなった。さて、今こそ、おまえに新しいドリ・コウピンを与えてもよいだろう」。

彼はしっかりとわたしを抱擁し、わたしのあふれる涙を手のひらでぬぐってくれました。そのとき、わたしはすでに45歳になっていました。

6-8. バウルの歌の大曲

1960年代の中頃のことだったと思います。わたしはモノホル・キャパから一通の手紙を受け取りました。その手紙には、「ブルリア県のある村で祭があり、そこで7夜連続のバウルの歌のファンクションが開催されるので、ぜひ参加するように」と書かれていました。わたしは、尊敬するモノホル・キャパの要請ですので、「よろこんで参加します」と返信しました。

さて、その村に到着して、とんでもないことを引き受けてしまったと後悔しました。「7夜連続のファンクション」と聞いていたので、わたし以外にも何人かのバウルが出演するものと思っていました。しかし、わたしに課せられていたのは、わたしひとりで、一晚3時間、しかも7夜連続でバウルの歌をうたうことでした。わたしはすっかりうろたえてしまいました。しかし、モノホル・キャパの要請で来たのですから、逃げ出すわけにはゆきません。

とにかく、初日をどう乗り切るかを必死に考えました。1曲につき3分ないし4分かかるとしても、3時間では50曲の歌が必要です。しかし、いくらなんでも3時間で50曲連続うたいっぱなしというのは不可能です。そこで、10曲あまりの歌をえらび、歌と歌のあいだに「語り」をくわえ、全体としてひとつのストーリーにまとめてみようと思いつきました。

ベンガルの村びとたちは、「リーラー・キールタン」が大好きです。リーラー・キールタンのプロの歌手は、クリシュナ神と牛飼いの女のラダーとの甘美な物語を、歌と即興の語りで演じ、3時間ないし4時間の舞台をつとめています。少年時代、わたしは祖父に、野外オペラの「クリシュナ・ジャートラ」で鍛えられた経験があります。その経

験をいかし、いくつかのバウルの歌を組み合わせ、語りでつないでリーラー・キールタンのように構成することを思いついたのです。「これならば3時間の舞台をなんとかこなせる」と自分を励まし、必死で初日の舞台をつとめました。

わたしはなんとか7日間の舞台をこなしましたが、それは冷や汗の連続でした。ファンクションが終了し、帰路モノホル・キャパのプルリアのアーシュラムをたずね、一部始終を報告しました。そして、「ひとりで7夜連続のファンクションとはひどいじゃないですか」と、抗議しました。モノホル・キャパは、「あれ、おまえひとりだと手紙に書かなかったかね」と、とぼけてニヤニヤしています。そして、わたしにいいました。

「ショナトン。おまえが冷や汗をかきながら経験したことは、バウルの歌と音楽にとって革命的なことなのだ。機転がきくおまえのことだから、なんとかすると確信していたが、おまえはわたしの期待にこたえたようだ。いくつかのバウルの歌を組み合わせ、語りでつないで全体としてひとつの物語にまとめるというのは、まさにわたしの意図していたことなのだ。わたしはおまえに、友人のクリシュナ・ダシュ・ババジ (Krishna Das Babaji) を紹介しよう。彼と相談して、バウルの歌の大曲を作りなさい。これは、おまえにしかできない仕事だ」。

クリシュナ・ダシュ・ババジは、タントリズムの系統に属するサハジーヤ派の行者ですが、宗教文学の研究者であり、また偉大な作家でもありました。わたしは彼に、ベンガルになじみのふかい人物の伝記や物語などを、庶民にわかる平易なことばでかいてもらいました。それらを題材にストーリーを相談し、数曲から十数曲のバウルの歌を組み合わせ、短いもので40分、長いものでは3時間の大曲にまとめました。こうして「チョンディダシュと洗濯女ラミーの物語」、「ビルバマンガルと遊女チンタマニの物語」、「チョイトンノ・マハブラブ伝」などの大曲が完成したのです。この作業は、クリシュナ・ダシュ・ババジが亡くなる1973年までつづきました。

6-9. ヴィシュヴァ・バーラティ大学の後援者

ヴィシュヴァ・バーラティ大学主催の「ポウシュ・メラ」に、わたしがはじめて出席したのは1953年のことです。ニタイ・キャパは、大学から招待状を受けとったのです。

「息子よ。ロビ・タクルのバウル・メラが、ポウシュ月（12月中旬～1月中旬）の7日にシャンティニケートンで開催される。わたしはその日に都合がつかないので、おまえが代理で出席しなさい。大学のホリ・バブが、おまえのめんどうを見てくれるはずだ」。

わたしはメラの前日にシャンティニケートンに着いたのですが、ホリ・バブはたいへん忙しく、彼の家でずいぶん待たねばなりませんでした。彼に会えたのは夜になってからでした。わたしは彼に、グルの代理でシャンティニケートンに来たことを話し、ニタ

イ・キャパが大学から受けとった招待状を見せました。ホリ・バブは、わたしにバウルの歌をうたうように求めました。わたしの歌を聞いて、彼は驚いたようすでいました。

「ショナトン・ダ、やりましたね。わたしたちはあなたにも招待状を送ることにしましょう。これからは、どうぞ毎年メラに来てください」。それ以来、わたしの名前は「招待バウル」としてリストアップされています。

その年のメラには、数人のバウルが出席しただけでした。そこには、ノボニ・キャパ、トリボンガ・キャパ、ディナボンドウ・ダシュ・バウルなどの有名なバウルがいました。それからあと何人か、わたしの知らないバウルがいました。

最初のポウシュ・メラ出席から数年後のことですが、カルカットで「ベンガル文化祭」が開催されるようになりました。わたしは、その祭典に招待された数人のバウルのひとりでした。「シャンティ・バブ」¹⁸が、文化祭の出演者選定委員会にわたしを推薦してくれたのです。シャンティ・バブは、一度、わたしに貴重な助言を与えてくれたことがあります。

「ショナトン。もしきみが尊敬に値するバウルになりたいのなら、きみはいつもそれにふさわしい歌をうたわねばなりませんよ。聴衆に迎合するような歌をうたってはけません。このことを、胆に命じておきなさい」。

わたしは、シャンティ・バブの議論には説得力があると思いました。そういえば、ニタイ・キャパは、いつも「トット・ガン」(バウルの宗教や儀礼にもとづいた歌)をうたっていました。ニタイ・キャパは、ことば遊びの楽しい「ショブド・ガン」を聴衆からリクエストされても、「そんなむずかしい歌は知らないよ」と、とぼけて、うたおうとはしませんでした。わたしは、シャンティ・バブに助言されて以来、常に「トット・ガン」をうたうように心がけています。たぶん、シャンティ・バブは、わたしの努力を正に評価してくれたのだと思います。

1966年に、わたしはボンベイで開催された祭典に招待されました。わたしは、西ベンガル以外の土地でのそのような盛大な祭典にはじめて出席したのです。シャンティ・バブの弟のショリル・バブが、バウルの歌の演奏会の進行責任者でした。シャンティ・バブが、わたしをショリル・バブに推薦してくれたのです。その当時、ショリル・バブは、『アノンド・バジャル・ポットリカ』¹⁹という新聞の記者をしていました。彼はわたしに、手紙にそえて、カルカットからボンベイまでの片道の交通費を郵便為替で送金してくれました。手紙には、ボンベイのヴィクトリア駅まで迎えに行くので、ハウラー駅の電報局から、わたしが乗車する列車を通知するように、と書かれていました。

18 ヴィシュヴァ・バーラティ大学音楽学部のシャンティデヴ・ゴーシ教授のこと。詩人タゴール直系の最後の弟子。

19 西ベンガルの有力日刊紙。英語とベンガル語で発刊。

ハウラー駅には早朝に到着しました。ボンベイゆき列車のチケットを購入したあと、その足で駅の電報局に行きました。わたしは、やはり電報を打ちに来ていた紳士に、「旦那！ 夕方の列車にのるんですけど、すみませんが、この人に電報を打ってもらえませんかね」と、ショリル・バブの住所をわたして依頼しました。電報文はローマ字なので、わたしは自分で電報を打てなかったのです。

ボンベイに到着したとき、わたしのほかにも3人のパウルの歌が招待されているのを知りました。わたしは彼らと一緒に、インド・ユニテッド銀行のホールやマハーラーシュトラ州知事の公邸などで毎日パウルの歌を演奏しました。

わたしはボンベイに7日間滞在しました。ショリル・バブはわたしをヴィクトリア駅まで送ってくれました。そして、ハウラーまでの列車のチケットと、祭典でのわたしの演奏に対する報酬として100ルピーくれました。

1970年のボウシュ・メラでのシャンティ・バブのことばが、わたしのラジオ出演のきっかけとなりました。

『『アカシバニ』²⁰のスタッフがシャンティニケートンに来たんだけど、きみは民俗音楽部門の歌手として、オーディションを受けてみる気はないかね』

わたしは、ぜひラジオに出演したいと、希望をつたえました。それを聞いて、シャンティ・バブは手紙を書いてくれました。その2ヵ月ほど後に、「貴殿のオーディションは、アカシバニにおいて、これこれの予定で実施する」という旨の手紙を受け取りました。オーディションでは、パウルの歌をたった1曲うたっただけでした。それからまた2ヵ月ほど後に、わたしがオーディションに合格したという旨の手紙を受け取りました。それ以後、3ヵ月に一度、わたしの番組がアカシバニで編成されるようになったのです。わたしは、15分あるいは20分の番組で、3曲ないし4曲の歌をうたうのが常でした。

1972年、わたしはデリーのラルケッラで開催された音楽祭に招待されました。わたしは特急列車でデリーにゆき、そこで4日間滞在しました。しかし、わたしに課せられた15分間の出番で、数曲の歌をうたっただけでした。わたしは「パウルの歌の経済的価値」に気づきました。主催者はわたしを招待するために莫大な出費をしました。それには、わたしの出演料やわたしのデリーでの滞在費、特急列車を利用した交通費などをふくみます。これらの費用が、わたしの数曲の歌でまかなわれていることに気づいたのです。

1970年代のなかごろから、わたしはときどき外国公演の招待を受けるようになりました。イギリスやフランス、アメリカ合衆国や日本などからの招待です。しかし、わたしは海外公演の招待をすべて辞退しました。なぜなら、わたしは「パウルのグループの一員」として処遇されたからです。主催者はいつも世話人を派遣しました。彼らはいつも、

20 インド国営放送カルカッタ放送局のベンガル語名。「天空からの神の声」の意味。

まず最初にカルカッタやシャンティニケートン地域で何人かのバウルに打診し、そしてそのあと最後に、交通の便のよくないコエルブニ村にやってくるのです。彼らはいつも主催者の命令書を提示し、消極的なわたしを説得しました。それには、「バウル・グループには、バンクーラのショナトン・ダシュ・バウルをふくめること」と、ありました。しかしわたしは、彼らがすでにバウル・グループを手配しており、しかもグループのリーダーはカルカッタに移住したプールノ・チャンドロ・ダシュだということに気づいていました。なぜ、わたしがプールノと一緒に行かねばならないのですか。わたしは、彼のグループの一員として海外公演に参加したいとは思いません。これが、わたしが外国公演を辞退してきた理由です。

1983年の秋、わたしは、ヴィシュヴァ・バーラティ大学音楽学部教授でバンクーラ出身のコニカ・バネルジー女史から速達の手紙を受け取りました。その手紙には、「大至急シャンティニケートンを来訪するように」と書かれていました。わたしが彼女を訪問したとき、彼女はわたしにいいました。

「ショナトン・ダ、よい知らせよ。イギリス政府は、バウル・グループをロンドン公演に招待したいと思っているの。そして、イギリス人女性がバウル・グループを選ぶために、ポウシュ・メラにあわせてシャンティニケートンにやってくるの。あなたにとって絶好のチャンスだと思うわ」。

「せっかくですが、わたしはそのグループの一員としてロンドンに行きません」。

「ちがうのよ、ショナトン・ダ。あなたは勘ちがいしているわ。イギリス政府は、あなたのグループを招待するのよ。彼らは正式な招待の前に、あなたに面会したいと思っているのよ。あなたは4人編成の音楽チームを組織しなければならないの。グループのリーダーはショナトン・ダ、あなたでなければならないのよ」。

わたしは、「今こそロンドンに行くべき時がきた」と思いました。イギリス人女性は、ほんとうにポウシュ・メラにやってきました。コニカ・バネルジー女史は、わたしのために自邸で音楽会を開催してくれました。彼女の邸宅には、小さいけれども趣味のいい常設の舞台が建設されました。イギリス人女性は、わたしたちの演奏をたいそう気に入ってくれました。

こうして、1984年の春、ロンドン公演に招待されたのです。そして、1987年にはパリ公演に、1991年にはアメリカ合衆国公演にも招待されました。

今ふりかえてみると、わたしを鍛えてくれたニタイ・キャパと、シャンティ・バブやコニカ・バネルジー女史などのヴィシュヴァ・バーラティ大学の先生方のおかげで、わたしはインド国内の大都市だけでなく、ロンドンやパリ、シアトルでもバウルの歌をうたうことができました。しかし、わたしは今、ふたたび「いなかバウル」です。

わたしは今でも、週に2回か3回は、近所の村々に出かけ、マドゥコリをしています。

わたしはそれを習慣にしています。マドゥコリの生活は、バウルの「ダルマ」(宗教的義務)です。村に出かけるとき、わたしは次男を連れていきます。村に到着すると、わたしは道路にそって、小さなシンバルをたたき「神の御名」を唱えながら歩きます。次男は太鼓をたたいて伴奏します。マドゥコリをしているとき、わたしは戸口で立ち止まらないことにしています。姿をみなくても、村びとは声を聞いて、わたしがマドゥコリをしているとわかります。わたしに何かを施与したいと思う人は、ひと握りの米や季節の野菜をもって、よろこんで戸口に出てきます。わたしも、よろこんでそれをいただきます。そして、たまたま施与する時間のない人は、それをわたしの次の訪問まで保管しておいてくれます。わたしは、忙しい人に喜捨を強要したくない。これが、わたしが戸口で立ち止まらない理由です。

わたしは、招かれないかぎり村びとの家に入りません。しかし、もし歌を所望されたら、そのときは家に入りバウルの歌をうたいます。もちろん、わたしは彼らとお茶をのんで、おしゃべりも楽しめます。それは、「いなかバウル」にとって、ほんとうに楽しいひとときです。

7. 歌姫の息子

7-0. はじめに

ビルブム県ボルプール市のビシュワナート・ダシュ・バウル (Biswanath Das Baul) は、1938年生まれの初老のバウルである。彼がマドゥコリの生活をはじめたのは、インド独立のころである。彼は、独立後のベンガル社会の急速な変化の影響を受けながら、バウルとしての人生を歩んできた。以下は、彼の物語である。

7-1. 父母のこと

わたしは、ビルブム県のサラシャ村で生まれました。わたしはそこで、母と兄と一緒に生活していました。母のジョグマヤ・ダシは、クリシュナ神の賛歌キールタンの名人でした。実際、あちこちのアーシュラムの祭に招待されてキールタンをうたうプロの歌手でした。母は「キールタンの歌姫」(キルトネール・ラニ)と呼ばれるほど華やかで、歌手としてたいへん人気がありました。

わたしの父パンチャナン・ムケルジーは、ビルブム県のコータ・シルシュ村で、わたしたちとは別に住んでいました。父はそこに、別の家庭をもっていました。父の実家は、最高位にランクされた由緒ある家柄の「クリン・バラモン」で、かなりの農地を所有していたようです。しかし、父は財産と家庭を捨て、バウルの道を追求するようになりました。父はパンチャナン・バウルと名のり、エクターラとドゥギを演奏しながら歌をう

たい、村から村へと放浪する生活をはじめたのです。

厳格な祖父にすれば、若いころからあちこちと外出し、結婚後もおちつかず人気歌手と恋仲になり、あげくのはてに妻と子を捨ててバウルになった父は、とんでもない「放蕩者」だったようです。しかし父にすれば、規則でがんじがらめのクリン・バラモンの生活と、意思に反した結婚生活をつづけることは、「耐えがたいこと」だったようです。

わたしが9歳のとき、オジョイ川が氾濫し大洪水が発生しました。わたしたちの住んでいたサラシャ村の家も流されてしまいました。わたしたちは、サラシャ村からボルプールの裏手のシュンリパラに移住しました。まもなく、パンチャナン・バウルとなった父が、その家に移住してきました。やっと同居できるようになったのですが、わたしたちの生活は急に貧しくなったような気がしました。

7-2. マドゥコリの生活

わたしは子どものころから音楽が好きで、母からたくさんの歌を習いました。そして、ときどきやってくる父からも、歌や楽器の演奏法を教えてもらいました。

わたしはシュンリパラに移住した頃から、経済的に自立しています。わたしは愛用のグブグビをいつももっていました。わたしがボルプールの道を歩いていると、茶店で休憩しているおとなたちが、わたしをよびとめます。「へーい！ こっちへおいで。こっちに来て歌をうたっておくれ」。わたしがうたいおわると、彼らはいつも2～4アナ²¹の小銭をくれました。わたしはまだ少年でしたが、1日に2～3ルピー稼ぐことができました。それは、日常生活をまかなうのに十分すぎるほどの金額でした。そのお金で好きなものを食べることができましたし、ときには衣服を買うこともできました。当時はすべての物価が安かった。

わたしの家はボルプール駅に近く、マドゥコリに出かけるにはほんとうに便利なところですよ。ボルプール駅はたいていの列車がとまります。わたしは鉄道沿線の村々だけでなく、列車のなかでも稼ぐができます。

子どものころ、わたしは村でのマドゥコリよりも、列車のなかで歌をうたって稼ぐほうが好きでした。というのは、村で受け取るのは米や季節の野菜などの重くてかさばる「現物」ですが、列車のなかではもっぱら「現金」だからです。しかし、おとなになってからは、列車のなかでうたうよりも、村でマドゥコリするほうが好きです。その理由のひとつは、列車のなかがいつも騒々しい雰囲気にあるからです。列車はガタゴトと音をたてて走ります。わたしが歌をうたっていても、さまざまな物売りがそれぞれ大声をはりあげて、わたしのそばをとおりすぎます。列車のなかは、歌い手のわたしにとっても、

21 1 アナは、16分の1ルピー。

聴衆の乗客にとっても、十分な環境ではありません。

もうひとつの理由は、列車のなかでは不特定多数の正体不明の乗客を相手に歌をうたわねばならないからです。おおぜいの乗客のなかには喜捨をしたくない人もいますでしょう。それでもその人は世間体をはばかりて、20パイサか25パイサの小銭を与えるでしょう。しかし、わたしがどこかの村のだれかの家でうたっている姿を想像してごらん下さい。そこには数人の聴衆しかいないけれど、彼らはわたしの歌をじっと聞いてくれる。そして、わたしの歌に満足した村びとは、ひと握りの米をよるこんで与えてくれます。それは、列車のなかの不本意な小銭よりもはるかにうれしい。

7-3. グル

わたしは若いころ、偉大なモノホル・キャパから入門式の「ディッカ」を受けました。モノホル・キャパとは、以前から何度もジョイデブ・メラでお目にかかっていた。わたしがモノホル・キャパに弟子にしてほしいとお願いすると、モノホル・キャパはその場でわたしにディッカ・マントラを授けてくれました。

わたしは、ゴーヴィンダ・ダシュ・ゴスワミ師から、世捨て人の身分への通過儀礼の「ベック」を受けました。この通過儀礼は父と母が準備してくれました。師は予定された日時にわたしの家にこられました。師は髪をそりおとしたわたしに、新しい「こつじきの鉢」と「ドリ・コウピン」を授けてくれました。そしてわたしに、「これからは、マドゥコリをして生活の糧を得なければならない。それは、おまえに許された唯一の方法である」と、いわれました。しかしそのとき、「グルの教えをまもるのは、それほどむずかしいことではない」と思いました。なぜなら、わたしはすでマドゥコリをして生活していたからです。

このようにして、ディッカとベックの通過儀礼を受けたのですが、わたしの人生でもっとも大事なグルは、おそらくシッカ・グルのトリバンガ・キャパでしょう。トリバンガ・キャパは、人びとから「キャパ・ババ」と呼ばれて尊敬されていました。わたしは子どものころからキャパ・ババのことを知っていました。なぜなら、キャパ・ババのアーシュラムで「モホットショブ」(宗教的宴会)などの祭が開催されるたびに、わたしの母が招かれ、そこでキールタンをうたうことになっていたからです。母からも、キャパ・ババがりっぱなバウルだということを聞いていました。

わたしは20歳すぎからしばらく、深刻に悩んだ時期がありました。クリン・バラモンの父とキールタン歌手の母とのあいだに生まれたわたしは、いったい何者なのだろうか。パウルの衣装を着て、パウルの歌をうたっているけれど、わたしはほんとうにバウルなのだろうか。このまま中途半端な人生をつづけてよいのだろうか。そうかといって、字も満足に読み書きできないわたしにできる仕事など、ほかにあるはずがありませんし

た。あれこれ悩んだのですが、結局は、わたしにはマドゥコリをするしか生きていく方法がないと痛感したのです。「マドゥコリの生活は、飢えよりましだ」と気づいたのです。そして、パウルとして生きてゆくなら、グルの指導のもとにしなければならないことがある、と気づくまで数年かかりました。わたしは以前から面識のあるキャパ・ババに導いてもらおうと決心しました。

わたしが25歳か26歳のとき、わたしはキャパ・ババのアーシュラムをたずね、弟子にしてほしいとお願いしました。しかし彼は、「せっかくだが、わたしには何も教えることがないからね。よそへお行き。ベンガルには有名なグルがたくさんいるじゃないか。そこへ行ってディッカ・マントラやシッカ・マントラを頼んでみなさい」と、わたしの願いを断りました。しかし、わたしはあきらめませんでした。わたしは近所の村々でマドゥコリをしながら、キャパ・ババのアーシュラムの軒下に泊まり込んだのです。わたしは1ヵ月以上も、そこでしんぼうしました。キャパ・ババも強情な人です。その間、ひと言も口をきいてくれませんでした。しかし、ついにわたしの粘り強さが評価されました。彼はついに入門を許してくれたのです。そしてキャパ・ババは、わたしにとって宗教的にも音楽的にも偉大な「シッカ・グル」となりました。

7-4. ベンガル社会の変化

わたしは、ほかのパウルのことはよく知りませんが、この40年間、わたしの生活環境は悪化する一方です。

およそ40年前、10歳の少年は歌をうたって1日2〜3ルピー稼ぐことができました。しかし今日では、わたしのような50歳の男性が1日マドゥコリをしても、2〜3キロの米と、2〜3キロの季節の野菜と、1〜2ルピーの現金を稼ぐのがやっとでしょう。今日の市場価格によると、米は1キロあたり4ルピーです。そして季節の野菜は、平均して1キロあたり2ルピーです。わたしの稼ぎを現金に換算してみるならば、それは1日につき13ルピーから20ルピーのあいだ、ということになります。

物価はどんどん上昇しているのに、わたしの稼ぎはそれにおいつきません。おおざっぱに計算して、当時の1ルピーの価値は、今の30ルピー以上に相当するでしょう。たとえば、わたしが10歳のとき、「ロショゴツラ」²²というお菓子の値段は1アンナ(16分の1ルピー)でした。しかし、その菓子は、今では2ルピーもします。

ほとんどのパウルは、わたしのように「やむにやまれぬ事情」でマドゥコリの生活をするようになったと思います。しかし、いつか必ず、パウルはマドゥコリだけでは生活できなくなると思います。おそらくパウルは、彼らの人生を通じて、いつも経済的な困

22 牛乳で練った団子を砂糖液につけた菓子。

難に直面してきたのだと思います。わたしたちの問題は、今でも金銭に関係しているということです。

わたしは、わたしを支援してくれている村びとたちも経済的困難に直面していると思います。わたしは、何年も前から「モホットショブ」(宗教的宴会)を開催しています。モホットショブには、250人ほどの客を招待します。仲間のバウルだけでなく、わたしを支援してくれている村びとたちも招待します。それはわたしにとって「よろこび」です。わたしは自分のよろこびをわかちあいたいので、村びとにいくら寄付を頼みます。彼らは自分の地位や身分に応じて寄付をしてくれます。1～2セル²³の米を寄付する人もいれば、1～2ルピーの現金を寄付する人もいます。モホットショブを開催するのに必要な約2モン²⁴の米と300ルピーの現金を村びとから集めるのに、約1ヵ月かかるのがふつうでした。しかし、マドゥコリだけでそれだけの米やお金を集めるのは、だんだんむずかしくなってきました。

わたしは、ベックの通過儀礼のときのゲルのことば、「マドゥコリは生活の糧を得る唯一の方法だ」をわすれたわけではありません。しかし、わたしはときどき「ゲルの教え」から逸脱しているようです。わたしはときどき音楽チームを編成し、音楽会でバウルの歌と音楽を演奏することがあるからです。そのようなとき、演奏の報酬として、一晚に100～200ルピーの現金を受けとるのがふつうです。そのお金は、たしかに臨時収入として家庭経済を潤します。しかしそのお金は、年に一度のモホットショブにもおおいに貢献しています。そのような臨時収入がなければ、モホットショブの開催がむずかしくなってきたのです。

7-5. 息子たち

わたしには3人の息子がいます。長男と次男はバウルの歌をうたいます。しかし、わたしは彼らのことをバウルとはみなしていません。以前、わたしは彼らに「マドゥコリの生活はバウルの宗教的義務だ」といいました。彼らは、一度はわたしの助言にしたがおうとしました。しかし、彼らはもはやマドゥコリに行こうともしない。彼らはバウルの歌を、音楽会でしかうたわない。わたしは彼らに、「マドゥコリで生活せよ」と強要すべきでしょうか。いいえ、すべきではありません。なぜなら、強制されてマドゥコリなどできないからです。

わたしの末の息子ですが、彼はバウルの歌を人前ではうたいません。まだ子どもだったころ、彼は音楽を習いたがりました。実際、わたしはバウルの歌やグブグビの演奏法

23 インドの重さの単位。1セル≒0.933kg。

24 インドの重さの単位。1モン=40セル≒37.35kg。

を教えました。今でも彼は音楽が好きですが、もはや他人のためにはうたいません。彼は、現在9年生で、大学進学を希望しています。大学を卒業すれば、よい仕事につける可能性があるからです。しかし、わたしはマドゥコリで生活するバウルです。わたしには彼の学費を負担することができません。わたしは月に2000ルピーの給料を稼ぐ男ではないのです。

7-6. 昔のバウルと今のバウル

ベンガル社会は急速に変化しています。このことは、一般の人たちだけでなく、バウル自身も認識していることと思います。ベンガル社会の近代化とともに、バウルの伝統も急速に変化していると思います。それが顕著になるのは1970年代になってからのことです。

わたしが知るかぎり、昔のバウル・グルは、弟子をきびしくきたえました。たとえば、わたしがキャパ・ババに歌を1曲習おうとすれば、最低5日間は彼のアーシュラムに泊まり込まねばなりません。そこに滞在中、わたしは彼のためにマドゥコリをするだけでなく、奴隷のように働かねばなりません。当時の若いバウルは、歌を習うのに積極的でした。積極的でなかったら歌を習えなかった。

しかし、今の若いバウルは歌を簡単に習えます。バウルの歌のカセットテープが商品として販売されています。彼らはグルなしに歌を習うことができます。しかしこれはベンガルのバウルにとっては危険なことです。テープレコーダーは、歌を教えたり習ったりするには、たしかに便利な機械です。しかし、同時にそれは、わたしたちにグルの必要性を忘れさせる危険な「わな」にちがいない。

わたしは、子どものころからさまざまなメラや祭に出席しました。シャンティニケートンのポウシュ・メラには、数人のバウルがやってきてただけでした。ノボニ・キャパやトリバンガ・キャパ、ニタイ・キャパたちです。わたしは彼らの歌にうっとりしてしまいました。「どうしたら彼らのように演奏したり、うたったりできるようになるのかしら」と思いました。わたしは彼らの表現力をうらやましいと思いました。すべてが生きて生きていました。それは、彼らがバウルのサドゥナを実践する「サドック・バウル」だったからだと思います。バウルの歌を通じて、彼ら自身の宗教的経験を表現していたのです。

わたしも彼らのように、「トット・ガン」(バウルの宗教や儀礼にもとづいた歌)をうたいたいと思います。しかし、そのような歌は、部内者のわれわれには「なぞ解き」をするようなおもしろさがあるのですが、部外者の聴衆にはなかなか理解できないのがふつうです。彼らはわたしに、「ビシュワナート・ダ! そんな訳のわからない歌じゃなくて、もっとわかりやすい歌をお願いしますよ」と、「ショブド・ガン」(気楽なことば

遊びの歌)をリクエストします。

聴衆だけではありません。今日、おおくの若いバウルがバウルの歌を理解していません。なぜなら、彼らはバウルの宗教や儀礼についての適切なトレーニングを受けていないからです。それでも彼らは、バウルの歌をテープレコーダーで練習して器用にうたっています。しかし彼らは、自分がうたう歌の内容を経験していない。

わたしはバウルの将来については悲観的な見方をしています。バウルの伝統は、いつか必ず消滅すると思います。バウルが消滅する主たる原因は、わたしたちがマドゥコリで生活しているからです。年々物価は上昇しているというのに、わたしたちの稼ぎはそれにおいつかない。わたしたちは、マドゥコリで生活しているからバウルなのに、マドゥコリで生活すること自体がむずかしくなっているのです。

わたしたちの国には、昔から「サドゥー」や「ヨーギー」、「ボイラギ」、「ファッキー」などの、「聖者」や「行者」がたくさん存在しました。彼らは世俗の生活を捨て、マドゥコリをして生活していました。わたしたちバウルも、そのような範ちゅうの人間です。世俗の人びとはそのような世捨て人を尊敬し、施与することによって彼らを支援してきました。そうすることが、世俗の人びとの「スヴァ・ダルマ」(本分)と考えられてきました。

しかし今日、人がもっとも努力することといえば、「豊かな生活の実現」です。朝はやく起きてヨーガの修行にはげみ、涼しいうちにマドゥコリに出かけ、「神がお与えになったもの」と感謝してささやかな日々をいとなむ、というような生活は、だんだん過去のものになりつつあるようです。

もしだれかがベンガル中を歩いて、バウルのサドゥナを实践する「サドック・バウル」を探したとしたなら、おそらく今なら200人か300人は発見できるかと思います。そして、10年か20年後に同じことをしたら、まだ4～5人は発見できるかもしれない。しかし50年後には、ベンガル中を探しても、そんなバウルはひとりもいないでしょう。しかし、バウルの歌をうたうプロの歌手は、おそらく50年先も健在だと思います。

Ⅲ. 跋 ―現地社会の一員になる―

文化人類学者は、長期のフィールドワークを通じて、現地の有力者の養子になるなど、しばしばインフォーマントと親戚同様の関係をもつようになることがある。わたしの場合も、ふたりのグルに弟子入りを許されたり、結果としてグルを共有するキョウダイ弟子になったりして、親戚同様の親密な関係をもつようになったバウルが何人かいる。本稿の最後に、わたしが現地社会の一員となったいきさつについて記す。

わたしのグルのひとり、バンクーラ県K村のショナトン・ダシュ・バウルである。

彼はライフヒストリーの語り手として登場した「いなかバウル」である。もうひとりのグルは、ビルブム県N村のゴール・ホリダシュ・バウルである。彼は、やはりライフヒストリーの語り手として登場した「振り子行者」が、自分の「孫」と語ったバウルである。

「いなかバウル」は、今日、もっとも有名なバウルのひとりである。彼は、音楽的技量や宗教的知識に卓越したバウルとして、ほかのバウルから一目置かれている。わたしは、彼のライフヒストリーを聞くために、せっせと彼のアーシュラムに通っていた。1回の訪問に、4日ないし5日滞在するのが常だった。ライフヒストリーの「語り手」である彼と、「聞き手」であるわたしとの関係は良好だった。最初の訪問から数ヵ月が経過した。彼の話はいよいよ佳境に入ってきた。しかし、ある日突然、彼は「もうこれ以上インタビューに応ずることはできないので、今後アーシュラムに来ないでほしい」と、わたしに通告したのである。わたしは、何か失礼なことをしでかしたのではないかと心配した。しかし、そうではなかった。彼は、儀礼をふくめた宗教生活に話題がおよぶのをおそれたのである。バウルの宗教儀礼は、もっぱらグルから弟子へと伝承されることがである。彼は、部外者であるわたしに、それを話すことができなかったのである。しかし、わたしは「あなたのお話をもっと聞きたいのですが、どうすれば可能ですか」と、彼にたずねた。彼はしばらく考え込んだあと、「グルと弟子の関係が成立すれば可能です。わたしはあなたを弟子にしましょう」とこたえた。こうして、わたしは「いなかバウル」の弟子になったのである。

わたしは、ビルブム県JK村の「振り子行者」とよばれる老バウルのライフヒストリーを聞くために、彼のアーシュラムに何度も通っていた。「振り子行者」という彼の愛称が暗示するように、彼は脳性小児まひの後遺症に苦しんでいた。それは5度目か6度目の訪問のときだった。話題はバウルの師弟関係についてだった。彼の話が途切れ、しばらく間があいた。そしてまた、ぼつりぼつりと語りはじめた。「…グルと弟子の関係は、父と息子の関係とおなじです。その意味では、わたしには孫がひとりいます。…わたしの孫は健康で利発な子でした。その孫がすくすくと成長して、みごとなバウルになりました。…彼は本物のバウルになるように訓練されたので、並のバウルではとても彼に太刀打ちできません。…わたし自身も、彼が物心つくころから、知っていることはなんでも教えました。…彼はまだ30代の若いバウルですが、彼こそわたしの後継者にふさわしい。わたしは、わたしに存在した責務のすべてを、今では彼にゆだねています。…わたしが使者を送れば、彼はここにやってきます。もしご希望なら、彼を紹介しましょう」。もちろん、わたしは紹介してもらった。こうして、わたしは「振り子行者」の「ひ孫」になったのである。

さて、ふたりのグルに入門すると、結果として、わたしには何人もの「キョウダイ弟

子」ができた。ライフヒストリーのインタビューの依頼も、キョウダイ弟子の紹介があると、比較的スムーズにすすむようになった。

キョウダイ弟子のなかで、とくに親密な関係をきずくことができたのは、シャンティニケートンのゴパール・ダシュ・バウルである。わたしは彼のことを「ゴパール・ダ」と呼びかけている。ベンガル語では、「・ダ」を親密な男性の名につけて呼びかけのこ とばをつくる。このゴパール・ダも、ライフヒストリーの語り手「10ルピー・バウル」 として登場している。

ゴパール・ダは、わたしの隣人のひとりだった。最初は挨拶をかわす程度であったが、わたしのベンガル語が上達するにつれて、彼はわたしの家に毎夕のように来るようになった。その理由は、彼がわたしの本棚にパウルの歌の代表的な歌集が揃っているのを みつけたからである。彼は宝物を発見したように、気にいった歌を自分のノートブック にせっせと書き写した。こうして、彼のノートブックにはパウルの歌がどんどんふえた のであるが、当時の彼はパウルの宗教や儀礼についての知識にとぼしかった。実際、彼 には音楽上の「教師」はいたが、宗教上の「導師」はいなかった。彼は、「ディッカ」 とよばれる特定のグルへの入門式も、「シッカ」とよばれる宗教的トレーニングも受け ていなかったのである。

ところがしばらくすると、ゴパール・ダは、パウルの宗教や儀礼についてしきりに知 りたがるようになった。そして、わたしに質問してきた。この件については、わたしは たいへん用心ぶかく対処した。というのは、わたしはパウルの研究者であるが、わたし 自身はバウルではないからである。わたしは、パウルの宗教や儀礼についての解説を、 たとえ彼にできたとしても、けっしてしてはならないと自戒した。パウルの宗教や儀礼 については、彼はパウルのグルから学ばねばならないと思ったからである。

しかし、わたしたちは毎夕の気楽な会話をおたがいに楽しんだ。そして、友情をふか めていった。最終的には、ゴパール・ダはわたしのもっとも親密な友人のひとりとなっ た。いや、それ以上かもしれない。フィールドワークが最終段階にはいったころ、わた しは彼を「いなかバウル」と「孫バウル」のアーシュラムへ連れていった。わたしは彼 を、ふたりのグルに紹介したのである。こうしてわたしたちは、導師を共有する「キョ ウダイ弟子」(グル・バイ)となったのである。

彼はそれ以後、わたしのことを「グル・バイ」と呼びかける。彼の妻も、わたしにそ う呼びかける。そして彼らの3人の息子たちは、わたしのことを「ジェトゥー」と呼び かける。「ジェトゥー」とは、ベンガル語の親族名称「ジェター」(父の兄)に対応する 親族呼称で、「伯父さん」である。このように、ゴパール・ダの家族とは、もう20年以上も 親戚同様の関係である。この関係は、死ぬまでつづくと思う。

参考文献

村瀬 智

- 2006 「ベンガルのパウルの文化人類学的研究(1)」『大手前大学社会文化学部論集』第6号、331-349頁。
- 2008 「ベンガルのパウルの文化人類学的研究(2)」『大手前大学論集』第8号、171-188頁。
- 2009 「ベンガルのパウルの文化人類学的研究(3)」『大手前大学論集』第9号、253-275頁。
- 2010 「ベンガルのパウルの文化人類学的研究(4)」『大手前大学論集』第10号、213-235頁。
- 2011 「ベンガルのパウルの文化人類学的研究(5)」『大手前大学論集』第11号、213-228頁。
- 2012 「ベンガルのパウルの文化人類学的研究(6)」『大手前大学論集』第12号、263-284頁。
- 2013 「ベンガルのパウルのライフヒストリーの研究(1)」『大手前大学論集』第13号、135-167頁。